Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-09-10

都市災害の記憶の共振とその歴史化 : 阪神・淡路大震災と東日本大震災から考える(第11回海港都市国際シンポジウム・第5回世界海洋文化研究所協議会大会報告要旨)

奥村, 弘

(Citation)
海港都市研究,11:61-64

(Issue Date)
2016-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81009368

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009368

KOBE UNIVERSITY

都市災害の記憶の共振とその歴史化

―阪神・淡路大震災と東日本大震災から考える―

奥村　弘

1. 阪神・淡路大震災２０年ー都市災害の記憶の歴史化という課題への対応

１９９５年の1月１７日5時４６分、淡路島北部深さ１６キロメートルを震源に、マグニチュード7．３の直下型地震が発生した。淡路島から神戸、芦屋、西宮、宝塚の各市で、気象台の観測史上はじめて震度７が記録された。この地震（兵庫県南部地震）により、関連死を含めて６４３４人が亡くなったとされている。地震の被害は、兵庫県南部から大阪府にわたる広い範囲に及び、日本列島を東西に結ぶ交通の要所を分断し、日本社会全体にも大きな影響を与えた。大都市域である阪神間を直撃した直下型地震は、狭い地域に集中的な被害をもたらし、全壊家屋は約１０万戸におよんだ(東日本大震災が約１３万戸)。１９９５年2月１４日､政府は、この大災害を「阪神・淡路大震災」と命名した。

２０年がたった。歴史学的に考えるなら、社会現象としての阪神・淡路大震災を区切る時期区分として２０年が有効であるのかどうか、それ自身問われることである。しかしながら、分かりやすい区分で時間的な区切りをつけ、そこで主体的に自らの記憶を呼び起こし、次の世代に継承していく営みとして「年忌」を捉えるならば、２０年は、記憶の継承のあり方を根本的に変える時機の到来を示す点で、特別な意味を持つ。

２０年という時間は、体験者の記憶を次世代へと社会的に継承するために、大震災の記憶を歴史として再構成し、それを社会的に引き続いていくことを必須としているのである。社会の構成員の大きな変化は、被災地の自治体やマスコミにも意識されつつある。神戸市は、震災直前の居住地をもとに、震災後に「市外から転居」「出生」の割合を「震災を経験していない」割合とみなした場合、震災を経験していない市民の割合は２０１３年に４２パーセントとなり、２０２１年には半数を超えるとの想定を行った。

2. 記憶が歴史化する場における共振作用ー阪神・淡路大震災と東日本大震災

東日本大震災後の震災資料の保存活用は、震災直後から様々な試行錯誤や実践が被災地を中心に続いているが、この研究会の中で、デジタルデータを中心とした国会図書館の活動と、被災各県の県立図書館を中心とした公立図書館の積極的な資料保存公開の活動が、持続的、体系的な資料保存において重要な位置を占めつつあることが、浮かびあがってきた。

被災各府県の公立図書館や大学図書館で震災資料の保存や公開を持続的体系的に進める活動が、

当初の手探りの準備期間を経て具体化しつつあること、その中で阪神・淡路大震災から現在に至る震災資料保存の具体的な過程そのものを共有することが基本的な課題となった。阪神・淡路大震災経験者にとっては、東日本大震災を通して、自己の記憶を問い直すものあったし、大震災を直接経験していない附属図書館の若い職員にとっては、東日本大震災のイメージを持ちながら、阪神・淡路大震災と附属図書館震災文庫の保存活用を、歴史として学ぶもの。(『平成 24 年度事業報告書　阪神・淡路大震災資料に関する研究会』神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター刊、2013 年３月)。

阪神・淡路大震災の聞き取りの中では、阪神・淡路の避難所運営において、神戸大空襲後の避難所での体験が想起された事例が見られる。アジア太平洋戦争の様々な記憶が歴史となっていく場は、それを直接に記憶している世代は少なくなったとはいえ、現在もなお慰安婦問題に見られるように鋭い対立の中で展開している。自然災害と人災との違いはあるが、その意味では、阪神・淡路大震災・東日本大震災等の大規模自然災害と戦争と都市の記憶の歴史もまた、相互に共振しあっている。

3. 記憶の歴史化と教訓の歴史化のせめぎ合いの中で

東日本大震災でも多様性の報道はほとんどない。神戸大学と東北大学を中心とした宮城県岩沼市での避難所を中心とする聞き取りと震災資料の保存の活動においても、ある被災者は「NHK で若い人たちが取材して歩いてるんだけど、そういう人に２回ぐらい取材受けてるんだけど、現在の状況に満足するようなこと言うとね、全然取り上げてもらえないから。やっぱりあそこが大変だとか、ここが大変だって言えば、たぶん取り上げてもらえるんだろうけど」(奥村弘他編『宮城県岩沼市における震災資料所在調査報告書』(神戸大学大学院人文学研究科、2014 年３月) 118 頁) と語っている。

避難所となった岩沼市市民会館館長の菅原清　「市役所に勤めていて建設関係に携わって、たぶん今でも現役だったら、今度同じような津波が来たって被害に遭わないように、「がっ」と止めなきゃないって言う思いが、たぶんかなり強くあったような気がするね。(中略) ところが俺はもう一般市民で、地域のなかで暮らしているわけですよ。地域の人、ここだってこれくらいの津波が来たんだけれども、今度は全体止めてほしいなんて、誰も一言も言っていない。津波が来たら逃げると。逃げ道をつくってくれと。(中略) こういうのが一般市民の思いだなとつくづく思いますよ。」(同上 38 頁)

高台に住んで、農業や漁業を行う時に下に降りていくという考え方に対して、農業や漁業の具体的なあり方から反論する。「夕方のご飯食べてから田んぼに行って、「水どのくらいかかったかな、もう少しだな」って、それで、家にかえってきて寝る前１１時ごろ毎回田んぼに行って水を止めたりして。あと、朝勤めに行く前に、５時から草刈りしたり。漁業だって一緒でし

ょう。（中略）生活と一緒に仕事をしているわけ。勤め人みたいに、８時半に出てきて漁業の仕事をして、５時になったら帰って来るのか。そういうことではないの。」（同上 39 頁）

一人の被災者自身の中で 2 つの見方が同居している。１つは高堤防、高台移転策を取らねばという自治体職員としての強に思いであり、他方はそこで生きる住民として、被災地のそれまでのあり方、地域の歴史的なあり方と被災の具体的なあり方とが重ね合わされたところから、職員の立場を批判した形で語られる具体的な対応策である。

被災地の状況を被災地外の人々に伝えようとする際、それを一般化することで強いイメージを発信しようとすることは、悪意から生まれるものではないし、意図的に事実をねじ曲げようとしているわけではない。しかしながらそれが、悲惨な災害から復興すべきであるとの一般化に止まり、そこに内在する個々の具体性を欠くことになるならば、災害の記憶は歴史として継承されるよりは、「きずな」や「人々のやさしさ」「いのちの大事さ」という抽象的な教訓、さらには徳目として記憶されていく。阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターの震災展示は、地震発生以前の被災地の歴史的差異はほとんど触れられず、被災地一般のイメージで作成された破壊された、その意味ではどこにも存在しない街の模型が展示されている。記憶の一般的化、教訓化による歴史性の排除は、社会的には、一般化や教訓化、徳目の形成が歴史であるという形で、歴史の意味を反転させてしまう。

4. 記憶の歴史化における震災資料とその活用の意義

これに対して記憶を歴史化していく作業が重要内見を持つ。先の岩沼市の聞き取り作業　は、東北大学の天野真志・小幡圭祐が行った。２人は、『東日本大震災岩沼の記録』（2012 年）を、菅原は震災時のメモを手元に置きながら、聞き取を進行させた。天野、小幡は『岩沼の記録』で概括的にしか書かれていないことや、情報の不十分な写真等を示しながら、菅原に質問を行い、菅原はメモを見ながらこれに応じ、その中で避難所の姿を具体化するというスタイルをとる。資料と聞き取りが深く関連するという方法は、この報告書を貫いている

このスタイルは、避難所の具体的なイメージを再構成する上で重要な視点を提示する。岩沼市市民会館の避難所は、阪神・淡路以来、長期の避難所生活の中で取り入れられてきた段ボール等によるパーティションを意識的に取り入れなかった避難所としてユニークな存在である。

震災資料と聞き取りの中でその理由が明らかにされていった。さらに震災資料に書かれている内容の精度を聞き取りから、再検討するものともなった。たとえば 2011 年 4 月 5 日朝引継の避難所引継書（同報告書、資料 57）によれば、「米軍軍楽隊によるロビーパフォーマンスがりました。18：30 から 45 分程度、音楽とダンスなどで皆さん盛り上がりました」との記述がある。しかし聞き取りでは「アメリカの軍楽隊が来たんです。迷彩服着て、戦闘服みたいなの着て演奏したんだけど、それで一番最初に演奏した曲が、『星条旗よ永遠なれ』でした。こいつら、

ほんと人の国に来て国旗を立てるようなことして。こいつらいったいなんだと思いましたね」（同 117 頁）とされている。ここでは震災資料しか保存されていなければ、このような思いを抱いた被災者がいたこと自身、忘れ去れてしまうことになる

岩沼市の取組においては、特別の方法が取られているわけではない。聞き取りを行った天野は維新期を、小幡は明治期をそれぞれ主な研究領域としており、避難所研究の専門家ではない。避難所という具体的な対象へのアプローチにおいて工夫はなされているものの、資料を収集保存し、さらに関係図書等を活用し、実証的な分析を通してその対象を深く捉え、それを当該期の歴史的な社会の中に位置づけ、能動的な歴史像を形成し、社会に提示するという手法は、歴史学において共通するものである。

このような手法を自覚的に展開し、社会的な理解を深める中で、記憶の一般的教訓化、それに基づく歴史の徳目化に対抗する社会的な力は、いっそう深まっていく。人は具体的にイメージできることしか、具体的に対応しえない。ここに、歴史学のみならず、人文科学の社会的役割の一つがあると考える。